

「時代の進化に抗して」

2016年09月03日

妻は私のことを「夏目漱石の時代を生きている」と言う。確かに、私は「デジタル」ではなく、「アナログ」である。古代生物が進化せずに生息しているガラパゴス島になぞらえ「ガラ携」という言葉もあるそうで、私は名実ともに典型的な「ガラ携」人間である。だから、時代の先端を行く芥川賞受賞作品を読みたいと、今年を受賞作「コンビニ人間」が掲載された『文藝春秋』を買った。一風変わった少女が成人して、徹底的に管理されたコンビニでアルバイトをしている女性と、彼女を取り巻く人々を描いた小説である。「選評」ではユーモアがあると称賛されていた。管理された社会で生きている現代人の姿を写し出したものであろうが、感覚で生きている彼らに同感することは少なかった。

その『文藝春秋』に特集された「戦争を知らない世代に告ぐ 戦前生まれ115人から 日本への遺言」は面白かった。政治、経済、学問、文化、マスコミ、文芸、スポーツなど多方面で著名人になった115人が、1頁くらいの短い文章で、日本への遺言を書いている。大方、現在の日本を案じて、批判的に書いている。政治では、戦争を知る人たちだから、安倍政権の戦争できる国を目指す政策に批判的であることは当然と言えよう。しかし、憲法を改正し、軍事力をつけ、皇室への畏敬の念を深めようという意見もある。経済面では、貧富の格差を危惧し、国の莫大な借金が将来、年金、医療、福祉などを賄えなくすると心配している。国民の精神的荒廃を嘆き、かつての日本の「勤勉で、優しく、律儀」な精神を取り戻そうと遺言している。現在の日本人（殊に若者）は新しいことに向かって前進しようとするパワーが不足していると指摘している。戦後社会の中で、それなりに業績を上げた人たちであるから、時代に迎合せず、自立して個性的に生きよと励ます論調になることも当然であろう。あの人があんなことを書くのかと驚くことも多々ある。

115人の遺言の中で、ファッション評論家のピーコ氏の「いつまでも紙の本を」は興味深く、同感した。彼は読書家で、暇があると本屋に足を運ぶという。作家の才能に驚愕したり、海外の文化に触れたり、行間を読んで想像を巡らせ、読書で養った想像力は役立つ。若者たちが熱中しているスマホでは語彙が減り、未知の言葉に触れることはない。本を読む習慣を身につければ、電子書籍では味わえない楽しい世界が広がる。だから「紙の本が、この先もなくなりませんようにーそれが今の私の願いです」と書いている。

劇作家の山崎正和氏の「電子情報は不毛の砂漠」にも同感した。情報の検索は、ボタン一つで一瞬のうちに入手できる。新聞や雑誌や本の活字媒体で知ろうとすると、たどり着く過程で別の情報に目が触れ、余分な知識を得ることができる。電子情報にはそれがない。求めることだけに目を向け、それ以外には目を閉ざすと、人間の心を痩せさせる。「スマホを手放して、長文の本や雑誌を読み、なま身の友人との会話を楽しむことを、とくに次世代を担う人々に勧めたい」と結んでいる。

私は読書家ではないが、次に読む本がないと落ち着かない活字人間であることは確かである。一世代前の若者たちは「デカンショ、デカンショで半年暮らす、後の半年や、寝て暮らす」と歌っていた。デカルト、カント、ショウペンハウエルなどの哲学書を読み、疲れたら寝て、再読した青春であった。私たちの時代は実存哲学者サルトルが流行っていた。

電車に乗ると7人座席で5人がスマホを楽しんでいる。多くはゲームのようだ。向こうから与えられたもので満たされ、自分を確保できない底の浅い文化になるだろう。絶滅危惧種は情報収集力が少ないために絶滅していくそうだが、私は過多な情報の遮断に大きなエネルギーを費やしている。「ガラ携」は絶滅するのみであろうか。